

[B年] 聖霊降臨節第17主日(2023年9月17日)

【旧約聖書日課】創世記 37章2～28節

²ヤコブの家族の由来は次のとおりである。ヨセフは十七歳のとき、兄たちと羊の群れを飼っていた。まだ若く、父の側女ビルハやジルパの子供たちと一緒にいた。ヨセフは兄たちのことを父に告げ口した。

³イスラエルは、ヨセフが年寄り子であったので、どの息子よりもかわいがり、彼には裾の長い晴れ着を作った。兄たちは、父がどの兄弟よりもヨセフをかわいがるのを見て、ヨセフを憎み、穏やかに話すこともできなかった。

⁵ヨセフは夢を見て、それを兄たちに語ったので、彼らはますます憎むようになった。⁶ヨセフは言った。

「聞いてください。わたしはこんな夢を見ました。⁷畑でわたしたちが束を結わえていると、いきなりわたしの束が起き上がり、まっすぐに立ったのです。すると、兄さんたちの束が周りに集まって来て、わたしの束にひれ伏しました。」

⁸兄たちはヨセフに言った。

「なに、お前が我々の王になるというのか。お前が我々を支配するというのか。」

兄たちは夢とその言葉のために、ヨセフをますます憎んだ。

⁹ヨセフはまた別の夢を見て、それを兄たちに話した。

「わたしはまた夢を見ました。太陽と月と十一の星がわたしにひれ伏しているのです。」

¹⁰今度は兄たちだけでなく、父にも話した。父はヨセフを叱って言った。

「一体どういうことだ、お前が見たその夢は。わたしもお母さんも兄さんたちも、お前の前に行って、地面にひれ伏すというのか。」

¹¹兄たちはヨセフをわんだが、父はこのことを心に留めた。

¹²兄たちが出かけて行き、シケムで父の羊の群れを飼っていたとき、¹³イスラエルはヨセフに言った。

「兄さんたちはシケムで羊を飼っているはずだ。お前を彼らのところへやりたいのだが。」

「はい、分かりました」とヨセフが答えると、¹⁴更にこう言った。

「では、早速出かけて、兄さんたちが元気にやっているか、羊の群れも無事が見届けて、様子を知らせてくれないか。」

父はヨセフをヘブロン谷から送り出した。ヨセフがシケムに着き、¹⁵野原をさまよっていると、一人の人に会った。その人はヨセフに尋ねた。

「何を探しているのかわね。」

¹⁶「兄たちを探しているのです。どこで羊の群れを飼っているか教えてください。」

ヨセフがこう言うと、¹⁷その人は答えた。

「もうここをたつてしまった。ドタンへ行こう、と言っていたのを聞いたが。」

ヨセフは兄たちの後を追って行き、ドタンで一行を見つけた。

¹⁸兄たちは、はるか遠くの方にヨセフの姿を認めると、まだ近づいて来ないうちに、ヨセフを殺してしまおうとたくらみ、¹⁹相談した。

「おい、向こうから例の夢見るお方がやって来る。²⁰さあ、今だ。あれを殺して、穴の一つに投げ込もう。後は、野獣に食われたと言えばよい。あれの夢がどうなるか、見てやろう。」

²¹ルベンはこの話を聞いて、ヨセフを彼らの手から助け出そうとして、言った。

「命まで取るのはよそう。」

²²ルベンは続けて言った。

「血を流してはならない。荒れ野のこの穴に投げ入れよう。手を下してはならない。」

ルベンは、ヨセフを彼らの手から助け出して、父のもとへ帰したかったのである。

²³ヨセフがやって来ると、兄たちはヨセフが着ていた着物、裾の長い晴れ着をはぎ取り、²⁴彼を捕らえて、穴に投げ込んだ。その穴は空で水はなかった。

²⁵彼らはそれから、腰を下ろして食事を始めたが、ふと目を上げると、イシュマエル人の隊商がギレアドの方からやって来るのが見えた。らくだに樹脂、乳香、没薬を積んで、エジプトに下って行くこうとしているところであった。²⁶ユダは兄弟たちに言った。

「弟を殺して、その血を覆っても、何の得にもならない。²⁷それより、あのイシュマエル人に売ろうではないか。弟に手をかけるのはよそう。あれだって、肉親の弟だから。」

兄弟たちは、これ聞き入れた。

²⁸ところが、その間にメディアン人の商人たちが通りかかって、ヨセフを穴から引き上げ、銀二十枚でイシュマエル人に売ったので、彼らはヨセフをエジプトに連れて行ってしまった。

【使徒書日課】

コロサイの信徒への手紙 3章12～17節

¹²あなたがたは神に選ばれ、聖なる者とされ、愛されているのですから、憐れみの心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けなさい。¹³互いに忍び合い、責めるべきことがあっても、赦し合いなさい。主があなたがたを救してくださったように、あなたがたも同じようにしなさい。

¹⁴これらすべてに加えて、愛を身に着けなさい。愛は、すべてを完成させるきずなです。¹⁵また、キリストの平和があなたがたの心を支配するようにしなさい。この平和にあずからせるために、あなたがたは招かれて一つの体とされたのです。いつも感謝していなさい。¹⁶キリストの言葉があなたがたの内に豊かに宿るようにしなさい。知恵を尽くして互いに教え、諭し合い、詩編と賛歌と霊的な歌により、感謝して心から神をほめたたえなさい。¹⁷そして、何を話すにせよ、行うにせよ、すべてを主イエスの名によって行い、イエスによって、父である神に感謝しなさい。

【福音書日課】ルカによる福音書15章11～32節

11また、イエスは言われた。「ある人に息子が二人いた。12弟の方が父親に、『お父さん、わたしが頂くことになっている財産の分け前をください』と言った。それで、父親は財産を二人に分けてやった。13何日もたたないうちに、下の息子は全部を金に換えて、遠い国に旅立ち、そこで放蕩の限りを尽くして、財産を無駄遣いしてしまった。14何もかも使い果たしたとき、その地方にひどい飢饉が起こって、彼は食べるにも困り始めた。15それで、その地方に住むある人のところに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやって豚の世話をさせた。16彼は豚の食べるいなご豆を食べてでも腹を満たしたかったが、食べ物をくれる人はだれもいなかった。17そこで、彼は我に返って言った。『父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ。18ここをたち、父のところに行つて言おう。「お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。19もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください。』』20そして、彼はそこをたち、父親のもとに行った。ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。21息子は言った。『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。』22しかし、父親は僕たちに言った。『急いでいちばん良い服を持って来て、この子に着せ、手に指輪をはめてやり、足には履物を履かせなさい。23それから、肥えた子牛を連れて来て屠りなさい。食べて祝おう。24この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ。』そして、祝宴を始めた。

25ところで、兄の方は畑にいたが、家の近くに来ると、音楽や踊りのざわめきが聞こえてきた。

26そこで、僕の一人を呼んで、これはいったい何かと尋ねた。27僕は言った。『弟さんが帰って来られました。無事な姿で迎えたというので、お父上が肥えた子牛を屠られたのです。』28兄は怒って家に入ろうとはせず、父親が出て来てなだめた。29しかし、兄は父親に言った。『このとおり、わたしは何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたことは一度もありません。それなのに、わたしが友達と宴会をするために、子山羊一匹すらくれなかったではありませんか。30ところが、あなたのあの息子が、娼婦どもと一緒にあなたの身上を食いつぶして帰って来ると、肥えた子牛を屠っておやりになる。』31すると、父親は言った。『子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ。32だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を聞いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか。』」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

ルカによる福音書15章11～32節

11また、イエスは言われた。「ある人に息子が二人いた。12弟の方が父親に、『お父さん、私に財産の分け前をください』と言った。それで、父親は二人に身代を分けてやった。13何日もたたないうちに、弟は何もかもまとめて遠い国に旅立ち、そこで身を持ち崩して財産を無駄遣いしてしまった。14何もかも使い果たしたとき、その地方にひどい飢饉が起こって、彼は食べるにも困り始めた。15それで、その地方に住む裕福な人のところへ身を寄せたところ、その人は彼を畑にやって、豚の世話をさせた。16彼は、豚の食べるいなご豆で腹を満たしたいほどであったが、食べ物をくれる人はだれもいなかった。17そこで、彼は我に返って言った。『父のところには、あんなに大勢の雇い人がいて、有り余るほどパンがあるのに、私はここで飢え死にしそうだ。18ここをたち、父のところに行つて言おう。「お父さん、私は天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。19もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください。』』20そこで、彼はそこをたち、父親のもとに行った。ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。21息子は言った。『お父さん、私は天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。』22しかし、父親は僕たちに言った。『急いで、いちばん良い衣を持って来て、この子に着せ、手に指輪をはめてやり、足には履物を履かせなさい。23それから、肥えた子牛を連れて来て屠りなさい。食べて祝おう。24この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ。』そして、祝宴を始めた。

25ところで、兄のほうは畑にいたが、家の近くに来ると、音楽や踊りの音が聞こえてきた。26そこで、僕の一人を呼んで、これは一体何かと尋ねた。27僕は言った。『弟さんが帰って来られました。無事な姿で迎えたというので、お父上が肥えた子牛を屠られたのです。』28兄は怒って家に入ろうとはせず、父親が出て来てなだめた。29しかし、兄は父親に言った。『このとおり、私は何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたことは一度もありません。それなのに、私が友達と宴会をするために、子山羊一匹すらくれなかったではありませんか。30ところが、あなたのあの息子が、娼婦どもと一緒にあなたの身代を食い潰して帰って来ると、肥えた子牛を屠っておやりになる。』31すると、父親は言った。『子よ、お前はいつも私と一緒にいる。私のものは全部お前のものだ。32だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。喜び祝うのは当然ではないか。』」

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・9月17日「聖霊降臨節第17主日」の日課主題は「新しい人間」。

・旧約聖書日課は、「創世記」から、「ヤコブの愛する息子ヨセフの物語」の冒頭部分。使徒書日課は、「コロサイの信徒への手紙」から、信仰者として「キリストの平和」のうちに生きることを勧める箇所。福音書日課は、「ルカによる福音書」から、

旧約日課(創世記 37章より)

・「創世記」は、「聖書」全巻の第一に置かれ、「原初の物語」と「父祖たちの物語」が記された文書。ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)の区分では、「律法」の第一巻として扱われる。「律法」五巻の中では、第二巻「出エジプト記」から第五巻「申命記」まで展開する「モーセの物語」と形式上は連続性を保ちながら、事実上大きく断絶した内容となっている。1～11章までが「原初の物語」、12～50章が「父祖たちの物語」。「父祖たちの物語」は、さらに、12～25章「族長アブラハムの物語」と25～50章「族長ヤコブの物語」に分けられる。また、両族長物語をつなぐ形でもう一人の族長「イサク」が登場し、「族長ヤコブの物語」には「十二人の息子たち」が登場して後半部からはこの息子たち世代の物語へと移行している。日課箇所は、「族長ヤコブの物語」の後半部の冒頭に当たる。「創世記」の「父祖たちの物語」は、設定上、アブラハムの父テラから始まる5世代の家族の物語として展開され、最後の世代が「イスラエル十二部族」それぞれの父祖となった人物として描かれる。

・日課箇所から始まる「族長ヤコブの物語」後半部は、ヤコブの十二人の息子たちのうち11番目の「ヨセフ」を中心に物語が進行するため、「ヨセフ物語」とも呼ばれる。ヤコブは二人の妻とそれぞれの女奴隷である側女、計四人の女性との間に子をもうけた者として描かれている(創世記29～30章)。二人の妻は、母方の伯父ラバンの娘「レア」と「ラケル」で、ヤコブは妹ラケルを好んでいたという設定になっている。また、レアの子らが先行して6人生まれたのに対して、ラケルの子らは最後に2人生まれ、しかもラケル自身は二人目を生んだ際に難産で死んでしまったという設定になっている。これを含めて12人の息子たちは4人の母親の違いによってグループ分けが明確にされているが、これは、後の「イスラエル十二部族」の成り立ちや相互の関係性を示唆していると考えられる。王国時代の諸部族関係で概観すれば、ヤコブの別名「イスラエル」の名を冠するのは北王国であり、北王国から見てレアから生まれた子ら(ルベン、シメオン、レビ、ユダ、イサク、ゼブルン)を父祖とする部族は周辺に領域を持ち、他方でラケルから生まれた子ら(ヨセフとベニヤミン)を父祖とする部族(ヨセフ族はエフライム族とマナセ族に分割)が北王国の中核を構成している。

・2節「由来」の原語「トーレドート」は、「系図」や「物語」とも訳され、「創世記」では「○○のトーレドート」という定型表現で要所ごとに現れる(2:4、5:1、6:4、10:1,32、11:10,27、25:12,13,19、36:1,9、37,2)。おそらく、古い伝承物語の「語り」の定型句をそのまま、あるいは意図的に用いて、「創世記」に描かれる物語が「出エジプト記」以降で描かれる物語と異質の伝承に基づくことを印象づけているのだろう。

・「ヨセフ」は、日課箇所中で「夢見るお方」(19節)と揶揄されている。「夢」は、「聖書」の世界では、「幻」と並んで神の啓示を知る現象として描かれる。ヨセフは、当初、自身が「夢」を見る者として描かれるが、兄たちによってエジプトに売られて行った後は、人の見た「夢」を解く者として描かれる。

使徒書日課(コロサイ3章より)

・「コロサイの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の7番目に置かれた書簡文書。アジア州(小アジア)の都市コロサイの教会共同体に宛てられ、また、同じ地域の都市ラオディキアの教会共同体との間で書簡を交換するよう指示されている(4:16)。同じアジア州の都市エフェソの教会共同体に宛てられた書簡「エフェソの信徒への手紙」と多くの内容が重複しており、同様の書簡文書が複数作成され、地域の教会共同体間で回覧されていたと考えられる。本書簡と「エフェソの信徒への手紙」については、現代の聖書学者の中には、パウロの真筆性を疑い、「第二パウロ書簡(偽パウロ書簡)」という扱いをする者があるが、「ローマの信徒への手紙」などパウロの主要な書簡と比較して用語法に大きな違いがあることなどを根拠としており、必ずしも説得力のある主張ではない。

・アジア州の教会共同体については、「ヨハネの黙示録」が取り上げている「アジア州にある七つの教会」(黙1:4)という枠組みが想定される。「使徒言行録」によると、パウロは、この「アジア州の七つの教会」にも数えられるエフェソで、二年ほど宣教活動に携わっている(使徒19～20章)。教会伝承では、このエフェソには、「使徒ヨハネ」を指導者とするグループが、サマリア、ガリラヤを経て移動してきて活動を続けたとされ、古代教会では「使徒ヨハネ」がアジア州の教会指導者と位置づけられている。この「ヨハネの教会共同体」のエフェソ移住と関係があるのかは分からないが、パウロは、エフェソでの活動を何らかの教会内部での対立によって中断させられ、その後はエフェソに入ることを注意深く避けたことが伝えられている(使徒20章)。本書簡や「エフェソの信徒への手紙」は、エフェソを離れた後に記されたと考えられるが、そのような事情を明示する記述は見当たらない。ただし、本書簡には、ユダヤ教の祭事にこだわる者や「偽りの謙遜(直訳は「謙った考え」)と天使礼拝にふける者」に対する批判が見られ(2:16～18など)、何らかの対立を抱えていたことはうかがわれる。

・日課箇所は、本書簡で展開した本論の終わりにまとめとして記された勧めである。15 節「キリストの平和」という思想は、「エフェソの信徒への手紙」でも見られる(エフェソ 2:14)。16 節「詩編(プサルモス)と賛歌(ヒュムノス)と霊的な歌(オーディー・ブネウマティコス)」のうち、「詩編」は旧約の「詩編」を指すが、残りの二つが具体的にどのような様式の歌を指すのかは不明。

福音書日課(ルカ 15 章より)

・日課箇所は、いわゆる「放蕩息子のたとえ」。これが語られた場面は、大きな設定としては 14 章から始まる「安息日のファリサイ派議員の家での食事の席」で、小設定は、主イエスが「徴税人や罪人」を伴ってきたことについて不平を漏らしたファリサイ派の人々や律法学者に対して語られた場面となっている。「見失った羊のたとえ」および「無くした銀貨のたとえ」とセットで同じ主題を扱ったたとえとなっている。共通主題は、「一人の罪人が悔い改めれば、神の天使たちの間に喜びがある」(15:10)という点にある。三つのたとえのうち、「見失った羊のたとえ」は「マタイ福音書」にも伝えられているが、残りは「ルカ」だけが伝えている。

・日課箇所のたとえは、前段の二つのたとえと同じ主題で理解することが求められている。その際、前段二つのたとえが、まとめ句として「一人の罪人の悔い改め」と記している言葉の意味は、丁寧に考える必要がある。つまり、「罪人の悔い改め」を主題としながら、前段二つのたとえが示しているのは、「失われたものが持ち主によって見つけ出される」という筋立てであり、「羊」や「銀貨」が自ら羊飼いや持ち主のもとに戻ってきたわけではない。このように、「罪人の悔い改め」は、このたとえにおいて、「失われたもの」の態度ではなく、「失われたものを取り戻す者」の意志によるものとして示されている。そこで、「放蕩息子のたとえ」においても同じ理解の枠が求められる。すなわち、「放蕩の限りを尽くした弟息子が、心を改めて父の家に立ち帰った」というストーリーではなく、「行く先がなくて仕方なく父の家に出入ろうとする息子を、父は、無条件で歓迎する」というストーリーとして解されるべきである。

・13 節「放蕩の限りを尽くす」は「ディアスコルピブー」で、「まき散らす」という語。16:1「無駄使い」も同じ語。
・このたとえは、「創世記」で父の家を離れたヤコブの物語(兄エサウと相続争いをしたヤコブは最終的に兄と和解した)を指し示すものとしても解されてきた。

来週の誕生日 (9月17日～23日)

主日礼拝の讃美歌から

・21-13 番「みつかいとともに」(= I 162 番「あまつみつかいよ」)は、18 世紀英国の独立教会牧師ペロネーの作詞。彼の父は国教会司祭でウェスレー兄弟のメソジスト運動の賛同者だったが、彼自身は、ウェスレー兄弟らとは袂を分かって独立教会に属した。

曲は、18-19 世紀米国で不動産業を営みながらピューリタン教会の牧師も務め、音楽活動もしたホールデンが、この詞のために作曲。

- ・21-549 番「わたしたちを造られた神よ」は、金城教会信徒の棚橋峯子の作で、公募により採用。『讃美歌 21』ではこの歌詞に二つの曲を付しているが、549 番は、阿佐ヶ谷東教会信徒・岸一隆がキリスト教音楽講習会讃美歌創作クラスで作曲したもの。
- ・21-364 番「いのちと愛に満つ」は、20 世紀後半の代表的な讃美歌作家レンの作詞。当初、従来の神観にとらわれない斬新な表現が物議を醸し、1987 年の合同メソジスト讃美歌集改訂版では不採用とされた経緯があるが、その後、多くの教派讃美歌集で採用されてきた。作曲のヤングは、米国を代表する教会音楽家・作曲家で、合同メソジスト教会の讃美歌編集に二度携わっている。

21-13「みつかいとともに」

All hail the power of Jesus name!

1. All hail the power of Jesus' name! / Let angels prostrate fall;
/ bring forth the royal diadem, / and crown him Lord of all. /
Bring forth the royal diadem, / and crown him Lord of all.
2. Ye chosen seed of Israel's race, / ye ransomed from the fall, /
hail him who saves you by his grace, / and crown him Lord of all. /
Hail him who saves you by his grace, / and crown him Lord of all.
3. Sinners, whose love can ne'er forget / the wormwood and the gall, /
go spread your trophies at his feet, / and crown him Lord of all. /
Go spread your trophies at his feet, / and crown him Lord of all.
4. Let every kindred, every tribe / on this terrestrial ball, /
to him all majesty ascribe, / and crown him Lord of all. /
To him all majesty ascribe, / and crown him Lord of all.
5. Crown him, ye martyrs of your God, / who from his altar call; /
extol the Stem of Jesse's Rod, / and crown him Lord of all. /
Extol the Stem of Jesse's Rod, / and crown him Lord of all.
6. O that with yonder sacred throng / we at his feet may fall! /
We'll join the everlasting song, / and crown him Lord of all. /
We'll join the everlasting song, / and crown him Lord of all.

21-364「いのちと愛に満つ」

Bring Many Names

1. Bring many names, beautiful and good, / celebrate, in parable and story, /
holiness in glory, living, loving God. / Hail and hosanna! Bring many names!
2. Strong mother God, working night and day, / planning all the wonders of creation, /
setting each equation, genius at play: / Hail and hosanna, strong mother God!
3. Warm father God, hugging every child, / feeling all the strains of human living, /
caring and forgiving till we're reconciled: / Hail and hosanna, warm father God!
4. Old, aching God, grey with endless care, / calmly piercing evil's new disguises, /
glad of good surprises, wiser than despair: / Hail and hosanna, old aching God!
5. Young, growing God, eager, on the move, / saying no to falsehood and unkindness, /
crying out for justice, giving all you have: / Hail and hosanna, young, growing God!
6. Great, living God, never fully known, / joyful darkness far beyond our seeing, /
closer yet than breathing, everlasting home: / Hail and hosanna, great, living God!